

二〇二四（令和六）年度

箕面自由学園中学校 入学試験

A日程午前 国語

【注意事項】

- 一、この問題用紙は、先生の「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
- 二、受験番号を必ず問題用紙、解答用紙の決められた所にはっきりと書きなさい。
- 三、解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
- 四、字数制限のある問題は、原則として句読点や記号も一字に数えます。（指示があるものはのぞく。）
- 五、印刷が不鮮明でよくわからない場合や、その他にわからないことがあった場合は、だまって手をあげ、先生にたずねなさい。
- 六、先生の「やめ」の合図があったら筆記用具を置き、問題用紙は上にして机の右側に、解答用紙は裏返して左側に置きなさい。

受験番号

--

1 次の新聞記事を読んで、後の問いに答えなさい。(上段の数字は行数を示しています。)

1	5	10	15
俳優 ^A のムロツヨシさんは、1浪して東京理科大学の数学科に入学し、すぐ不安になった。数学はトクイ ^① なつもりだったのに、授業についていけない。将来 ^B やりたいこともはっきりしない。そんなときファンだった深津絵里さんの出ている芝居を見に行き、ヤクシヤ ^② たちのエンギ ^③ に感動した。	「僕もあっちに行きたい！」と思い、夏には大学をやめてしまったとポパイ特別編集 ^C 『二十歳のとき、何をしていたか?』で語っている。本人いわく「根拠のない自信」で走り出した。3年くらいの下積み後はテレビや映画に出て……などと □算用しながら。	しかし芽は出ず、日雇いバイトばかりの25歳のある日、涙が止まらなくなった。「根拠のない自信を使い果たしちゃったんでしようね」。それからヨケイ ^④ なプライドは捨てて「僕を使ってください」とみっともないくらいに言い回ったという。 あの独特 ^D の存在感 ^E 。それを形作るに至 ^F った若き日である。	たしかに根拠など気にしたら、自信は持てない。だってケイケン ^⑤ がないのだから。しかしその自信はどこかでくじかれるウンメイ ^⑥ にある。だって根拠がないのだから。それでも何かエンジンを身につけることで、人は前へ動き出すことができるだろう。 きょうは成人の日。十分若くても、気持ちだけは若くても、自分のなかのエンジンを探 ^G りたい。「夢」というと気恥ずかしければ「好き」「こだわり」という言葉もある。□回 ^⑦ りもむだではない。ムロ青年にとって「根拠なき自信」のジキ ^⑦ が必要だったように。

(2021年1月11日 『朝日新聞』より)

問一 — 線部A～Gの漢字の読みをひらがなで、それぞれ答えなさい。

問二 — 線部①～⑦のカタカナ部分を漢字に直して、それぞれ答えなさい。

※問三・問六の⑧～⑩は解答らんの番号です。

問三 5行目⑧「映画」・14行目⑨「必要」の熟語の成り立ちとして適当なものを次のア～エからそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- ア 上と下が似た意味になっているもの。
- イ 上が主語、下が述語になっているもの。
- ウ 上が下を修飾している（詳しく説明している）もの。
- エ 下から上へ読むと意味が分かるもの。

問四 6行目「□算用」の□に入る言葉として適当なものを、次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 引
- イ 皮
- ウ 数
- エ 足

問五 14行目「□回り」の□に入る言葉として適当なものを、次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 上
- イ 左
- ウ 空
- エ 右

問六 5行目⑩「出」・9行目⑪「若」の音読みを、それぞれカタカナで答えなさい。

② 次の会話は、A先生とBさんとの会話です。後の問いに答えなさい。

A先生 Bさん、先日はおいしいお土産^①をありがとう。他の先生方と一緒にいた^②きました。

Bさん それは良かったです。家族で日光に行つたんですよ。ちょうど紅葉^③のシーズンで、道が混んでいて大変でした。

A先生 旅光中^④、写真は撮^とりましたか？

Bさん もちろん！ 特^⑤に華厳^{けいこん}の滝^{たき}がすばらしくて、行きにも寄つたのですが、家族^⑥に頼んで帰りにもう一度寄ってもらつたんです。訪ねる時間帯が違つたので、光の差し方が違つて……ほら、見てください。滝に虹がかかつて、とてもきれいでした。

A先生 動画もとつたのですね、迫力があつて、すばらしい。

Bさん 明智平^{あけちだいら}という、少し離れたところから見る華厳の滝も良かったのですが、エレベーターで行く観瀑台^{かんぱくたい}から間近に見る滝は一段と迫力がありました。

A先生 華厳の滝は、日本三大名瀑の一つでもあります。それほど気に入つたのなら、また訪ねられるといいですね。

Bさん はい、必ず行きます！

問一 — 線部①「土産」の読みをひらがなで答えなさい。

問二 — 線部②「いた^き」について、次の問いに答えなさい。

(1) 敬語の種類として適当なものを次のア～ウから一つ選んで、記号で答えなさい。

ア 尊敬語 イ 謙讓語 ウ 丁寧語

(2) 敬語ではない、ふつうの言い方にしなさい。ただし、「くりました。」に続くように答えること。

問三 — 線部③「紅」・④「中」・⑥「家」の漢字の成り立ちとして適当なものを次のア～エからそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- ア 象形文字(ものの形をかんだんな絵で表したもの)
- イ 指事文字(形で表せないことがらを、点や線で示したもの)
- ウ 会意文字(いくつかの文字を組み合わせて、新しい意味を表したもの)
- エ 形声文字(意味を表す文字と音を表す文字を組み合わせてできたもの)

問四 — 線部⑤「特」を正しい書き順で三画目まで書きなさい。

問五 この会話を「ことわざ」で表したものととして適当なものを次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 犬も歩けば棒にあたる
- イ 百聞は一見にしかず
- ウ 覆水盆かくすいぼんに返らず
- エ 五十歩百歩

問六 本文中に、漢字を誤って使っているところが一か所あります。誤って使っている漢字を一字選んで、正しい漢字に直して答えなさい。

③ 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

言語ゲーム、それはその名のとおりに、「言語とはゲーム①のようなものである」というウイトゲンシュタイン独特の言語観げんごかんを示す哲学用語ていがくである。

言語が「ゲーム」とはどういうことか。その前に、まずそもそも「ゲーム」とは何かというと、それは「一定のルールの集まり」だと考えることができる。

たとえば、野球というゲームを例題にあげてみよう。知つてのとおり、野球にはさまざまなるルールがある。打つたら一塁いっすいに走るんだよとか、ホームインしたら一点入るんだよとか、三回空振りからぶしたらアウトだよとか。そういうルールがたくさん集まって、野球というゲームが成立しているわけである。

しかしだ、それらのルールに何か根拠こんこがあるのかと問われると答えるのは難しい。

「打つたあと、なぜ一塁へ走るんですか？ 三塁に走ってもいいじゃないですか？」

② そんなこと言われても困ってしまう。そういうのは「ルールだから」としか言いようがない。それでも、「ねえ、なんで？ なんでそんなの？」としてこく問われたら、「うるせえ！ ルールだって言ってるだろ！ このゲームに参加したいんだったら、黙だまってこのルールを守れ！」と言うしかないだろう。

つまり、ゲームというものは、複数のルールからできているが、それらのルールには「そうでなくてはならない根拠」というものは存在せず、言ってしまうえば、ゲームとは「偶然的くわんぜんに、たまたま、そうなたただけのルールの集合によって成り立っているだけのもの」なのである。

その点について言語も同じだとウイトゲンシュタインは言う。

言語にも、たくさんのルールがある。「リン・ゴ」という音声記号が、原則として「現実世界のリンゴ」を指し示すものだというのは、同じ文化圏ぶんかけんに暮らす人々の間にある約束事（ルール）だし、お腹を押さおえながら「リン・ゴ」と発すれば、それは腹が減ったからリンゴを食わせろという意味になるのも、ひとつの約束事（ルール）である。そして、それらのルールにそうでなくてはならない根拠はないし、実際に、③別の文化圏ではまったく違う意味になって通じなかつたりする。

I、言語も、ゲーム同様、「偶然的に、たまたま、そうなたただけの無根拠なルールの集合として成り立っている」のであり、僕ぼくたちはそういうルールに乗っかって意味のやり取りをしているのである。

さてさて、言語が無根拠なルールの集まり、ゲームみたいなものだったとして、だからどうしたと言うのだろうか？

ここから、ウイトゲンシュタインはあまりにも「極端きょくたん」な、とんでもない結論を導き出す。それは、次のようなものだ。

「というわけで、言語はゲームみたいに、何の根拠もないルールからでき上がっているわけだが、そうすると、今までの哲学が一生懸命考へてきた『真理とは何か』『善とは何か』とかも、すべて何の根拠もないルールの枠組みの中で考えられてきたことになる。てことは、それらの主張って、全部ただのゲームのお遊び……、くだらないナンセンスなおしゃべりだったってことになるんじゃないの(笑)」
ちよつと整理してみよう。

(1)まず、大前提として、人間の思考は言語的に行われているものとする。つまり、「思考」あ【言語】であるという前提だ。

(2)しかし、言語の正体が、何の根拠もないルールの集合であり、「言葉の意味」がこの無根拠なルールによって決まっているとしたら：

…、人間はどんなに言葉を重ねて「答え(意味)」を導き出そうと、それは、あくまでも、「その無根拠なルールの中において導き出された答え(意味)」にすぎなくなる。

(3)したがって、言語がそうである以上、人間はどんなに思索を重ねても、普遍的で客観的な答え(意味)にたどり着くことはできない。

だから、言葉に言葉を重ねて、ゴニョゴニョ言ってきた今までの哲学は全部ダメなんだよという話になるのだが、まだちよつと難しいかもしれない。では、この話をさっきの野球でたとえてみよう。

Ⅱ、こんな命題があったとする。

「バットでボールを打ったあと、一塁に走った。はたして、この行動は正しいか？」

単純に野球のルールに照らし合わせれば、この命題は、「正しい」が答えになるだろう。しかし、その答えについて、「それは普遍的で客観的な、本当に間違いのない答えですか？」と詰め寄られたらどうだろう。

そこまで言われたら、こう言わざるをえなくなる。

「あくまでも、僕が知っている野球のルールの上では、『正しい』という答えになるってだけの話だよ。もし、三塁に走るというルールの野球があったとしたら、さっきの命題の答えは逆になるだろうね」

そこでさらに、こう聞かれたらどうだろうか。

「では、この『バットでボールを打ったあと、一塁に走った。この行動は正しいか?』という命題について、普遍的で客観的な答えを導き出すことは可能ですか?」

それについてはきつと、こう回答せざるをえないだろう。

「いいや、無理だ。どんなに議論したって、どんなに考えたって不可能だよ。だってそんなのゲーム次第でしょ? どんなゲーム(ルール)の

上で、その命題を解釈するから『正しい』『正しくない』が決まるんだから……、その問いに普遍性や客観性を求めること自体がナンセンスだよ」

それは確かにそうだ。逆の立場で考えてみよう。突然、知らない国のやつがやってきて、「うちの国のソキユウというゲームでは違う！そもそも、ボールなんか打たないし！だから、その命題は絶対に正しくない！」と言われたって、「何言ってるの」って感じだろう。そんなものは、おまえのところのルールがたまたまそうだから、たまたま正しくなかっただけの話だ。ようは、自作自演。彼の主張に、何の普遍性も客観性もないことは誰の目からも明らかであろう。

Ⅲ、困ったことに彼はそれに気づかない。普遍性も客観性もないというあなたの指摘に顔を真っ赤にして怒鳴りつけてくる。さらには、分厚い本、何百ページにもわたりびっしりと文字が並べられた本を取り出し、お説教すらしめてくるしまつ。

「みろ、高名な〇〇先生も、こう書いてるだろ！ て言うか、この本読んだことあるのか？ 基本の文献だぞ！ これを読んでもいないやつがこの命題について偉そうなことを言うな！」

いやいやいや。完全に的外れ。そういう問題ではない。その本がどんなに基本だろうと偉大だろうと関係ない。そもそも「命題に普遍的で客観的な真偽を求めていること自体がすでに間違いで不可能」なのだ。

さてさて。ここまでくれば、わかってもらえただろうか。ようするに、ワイトゲンシュタインは、「今たとえにあげた『ゲームの上での正しさを、普遍的な正しさだと思いついて訴えてくる勘違い男』と『哲学者』は同じだよ」と言ってしまったわけである。

そもそもとして言葉の意味が、「無根拠なルールの集合」すなわち「ゲーム」のようなもので決まっているのだとしたら、どのような命題であれ、その命題について「正しい」「正しくない」を訴えることはすべて不毛な行為だと言える。だって、そんなものは、どんなゲーム(ルール)を持ってくるかでいくらでもひっくり返せるからだ。だから、言葉に言葉を重ねることで普遍的で客観的な真偽を求めようという哲学の営み自体が、最初から間違いで不可能だったのである。

にもかかわらず、哲学者たちはそれができると信じて、言葉を重ね続けてきた。

全部ダメ！ 全部勘違い！

つまり、ワイトゲンシュタインは、人類が二〇〇〇年以上もかけて必死に積み上げてきた膨大な哲学書の山を、

「言語ゲーム(笑)」

の一言ですべて台無しにしてしまったのである。

(飲茶『14歳からの哲学入門「今」を生きるためのテキスト』より)

※問題作成の都合上、本文の一部を変更へんこうしています。

(語注)

※ウイトゲンシュタイン：オーストリア生まれの哲学者。

※哲学：人生、世界、事物のあり方や原理を追い求める学問。

※ナンセンス：意味のないこと。ばかげたこと。つまらないこと。

※思索：筋道立てて論理的に考えていくこと。

※普遍：すべての物に共通すること。

※命題：言葉や式によって表した、解くべき問題や課題のこと。

問一 — に入る言葉として適当なものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

ア たとえば イ つまり ウ だが エ ところで

問二 — 線部①「ゲーム」の本文中での意味を、本文中から四十字で見つけ、最初と最後の三字をぬき出して答えなさい。

問三 — 線部②「そんなこと」が指す内容を、「」ということ。「」につながるよう、本文中から十三字でぬき出して答えなさい。

・ (十三字) ということ。

問四 — 線部③「別の文化圏ではまったく違う意味になって」について説明した次の文の空らんらんに、適当な表現を三十字以内で考えて書きなさい。

・ 特定の場所では「お腹がすいた」という意味であっても、別の文化圏では、お腹を押さえながら「リング」と言ったとき、
(三十字以内) という意味であってもよい。

問五 「あ」に入る算用記号として適当なものを次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

ア + イ - ウ × エ =

問六 ——線部④「あくまでも、僕が知っている野球のルールの上では、『正しい』という答えになるってだけの話だよ。」と同じ意味を示す表現として適当でないものを、次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

ア あなたが思い描く野球という競技のルールの上では、「間違っている」かもしれないね。

イ 当然、間違いのない答えだとも。野球のルールは「どのような場合でも通じる」ように作られているからね。

ウ そんなことはあり得ないよ。それぞれの考えている野球のルールが「異なる」かもしれないからね。

エ 僕が知っている競技としての「野球」では、少なくとも「正しい」となるだろうね。

問七 ——線部⑤「それ」とはどういうことですか。「自分の発言に」から書き始めて、二十五字以内で答えなさい。

問八 ——線部⑥「台無し」について説明をした次の文の(A)～(C)に適当な表現を、6ページ～最後まで本文中から見つけ、それぞれ字数にあった言葉をぬき出して答えなさい。

・(A 二字)を用いた今までの哲学という営みに対して、ワイトゲンシュタインは「(A 二字)そのものが(B 十字)にすぎず、(C 七字)をもたないため、今までの哲学の営み自体が間違いであったと証明してしまったということ。

④ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

疲労ひろうというものは、時間と正比例せいひれいしているわけではないらしい。

何度か小さな坂を越こえるようにして、階段を上るように体内にたまっていくのだ。

日が暮れた頃には、これでまだ全行程の半分以下だなんて信じられない、と【A】な気分ではたはずなのに、すっかり暗くなってしまった今、最初の疲労のピークはどこへやら、時間がリセットされたかのように、みんなが元気を取り戻もどしてしまっている。

身体が慣れたのかもしれないし、あきらめたのかもしれない。それまでは、これからのことにおっかなびっくりで、身体がたえることに拒否ひひ反応を示していたのが、ようやく丸一日つきあうことに納得なつとくしたような感じがする。

ともあれ、夜になって一行は生気を取り戻し、そこからにぎやかなおしゃべりが聞こえてくる。周囲がにぎやかになると、つられてなんとなく【B】してくるから現金なものだ。

しかし、信号で走らされると、身体のアマリの重さにびっくりする。

気持ちの上では復活しているつもりだが、下半身が気持ちについてこない。身体には、やはり疲労がちゃんと歩いた分だけ蓄積ちくせきされているのだ。

「急いで！　そこまで渡り切ってください！」

工事現場の誘導灯ゆうどうとうみたいなのをくるくる振り回して実行委員が叫せけぶ。

彼らの驚異きょうい的な体力に感心しつつも、おのれの身体の重さから、ついついせかす彼らを恨うらんでしまう。

「しかし、本当に偉いね彼らは」

「どういう鍛え方きたしてるんだらう」

「実行委員は別メニューで秘密特訓ひみつとくくんかなんかしてるに違ちがいない」

ぜいぜい言いながら信号を渡り切り、貴子と梨香は悪態あくたい半分、賞賛しょうさん半分でつぶやいた。

いつのまにか、コースは海から離はなれていた。ずっと海沿いの国道を歩いていたのが、内陸部に向かう幹線道路に入ったらしい。交通量も、さっきの四車線の時よりもぐっと減って、辺りは生徒たちのおしゃべりしか聞こえない。

街灯の数が減ったので、足元には注意が必要だ。アスファルトの舗道ほどうやガードレールの上を行き交う懐中電灯かいちゆうでんとうの明かりがチラチラと揺れていて、本当に蛍ほたるの群れが移動しているみたいだ。

なんとなく、懐中電灯をあちこちに向けてみる。

空に光を向けてみると、たちまち宙にかき消された。

「何やってんの、貴子」

「星、出てる？」

梨香と千秋が空を見上げながら歩いている貴子に声を掛けた。

「んー、まだよく分かんない」

星を見るには、これでも街灯が明る過ぎるのだ。

「快晴ではないような気がする」

「ほんとだ、雲が出てるんじゃない？」

千秋がつぶやいた。

「明日の天気、大丈夫かな」

「今日と明日は快晴って予報では言ってたけど」

「降られたら困るね」

「いつだっけ、自由歩行の時に雨降ったの」

「一年の時じゃない？ 朝二時間くらい降ったのよね」

「えらい寒かった記憶がある」

「雨は嫌だよね。風も嫌だけど」

「去年は星がすごかったよね」

千秋が貴子を振り返った。

「ああ」

本当に、降ってきそうだね。

突然、杏奈の声がよく見える。

アスファルトの道路の感触。リュックを枕に道路に足を投げ出して寝転んでいた少女たち。ほんの一年前。もう一年前。

杏奈が隣で顔を動かすのを感じたような気がした。

昨年は、山の中のコースだった。起伏の激しいコース。とにかく、本当に何も無い山中だから、周囲に照明は全くなかった。

夜中の小休止で、疲れ切った生徒たちは道路に腰を下ろし、貴子と美和子は杏奈をはさんで道路に寝転がった。

あー、疲れた。と叫んで目を開いた瞬間、目に飛びこんできたのは、文字通り、闇にグラニュー糖をまぶしたような星空である。少女たちは悲鳴に近い歓声を上げた。こんなにすさまじい量の星を見たのは生まれて初めてである。普段はせいぜい、天文図鑑や教科書に載っている程度のぼつんぼつんとした星しか見たことがなかった。

うそー、星ってこんなにいっぱいあるんだ。これ、はつきり言って星の方が黒い部分より面積多いよ。みんなで空を見上げていた。降るような星、というよりも、こちらが空に落ちていって、星の中に溺れてしまいそうな眺めだった。空で溺れている三人が、身体についた星を手で振り払っているところを想像した。

④「なんだか怖い。だんだん向こうに落ちていくみたい。」

杏奈がつぶやいた。

うん。吸い込まれそう。あんなところに放り出されたら、帰ってこられないね。

貴子も答えた。

あんなにいっぱいあると有り難味がないわね。どんなにきれいなものも、過剰にありすぎると、グロテスクになっちゃうのね。

美和子が例によって「C」な感想をもらった。

あははは、と杏奈が急に笑い出した。

三人で空に向かって上げた笑い声が、耳元で聞こえたような気がした。

あれから一年なんて、信じられない。昨日のこのように感じるのに。

貴子は懐中電灯を足元に向けた。あまりにも鮮明に記憶がよみがえったので、すぐ隣に杏奈と美和子がいるような錯覚を感じたほどだ。不意にもどかしいような懐かしさにおそれ、美和子に会いたくなかった。なんのканのいって、今日はまだ歩き始めてから一度も会っていない。夕食の休憩の時には会いに行こう、と決心する。

それにしても、闇の中を歩いているせいだろうか。夢でも見ているように、生々しく過去の記憶がよみがえってくる。昼間も度々そんなことがあったけれど、日が落ちてからますます鮮明だ。⑤「二年の時は、こんなふうに感じたことはなかったのに。」

(恩田陸『夜のピクニック』より)

※問題作成の都合上、本文の一部を変更しています。

問一 「A」「C」に入る言葉として適当なものを、次のア～エからそれぞれ一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- ア 現実的
- イ 楽観的
- ウ 理想的
- エ 絶望的

問二 〰〰線部「もどかしい」の意味として適当なものを、次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア じれったい
- イ いたずらな
- ウ 落ち着かない
- エ あっさりした

問三 〰線部①「これからのこと」の意味として適当なものを、次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 希望
- イ 欲求
- ウ 多難
- エ 無意味

問四 「B」に入る言葉として適当なものを、次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア がっかり
- イ わくわく
- ウ びくびく
- エ おどおど

問八 — 線部⑤「一、二年の時は、こんなふう感じたことはなかったのに。」とありますが、なぜ今はこんなふう感じているのですか。理由として適当なものを次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 三年までの様々な経験によりそれぞれが成長し、もう二年もたったのかとなつかしく感じているから。
- イ 一年次は初めてで何が何だかわからず終わってしまったので、今では一年生にもどりたいと思っているから。
- ウ 一年次を思い出して、同じようには過ごせないつらさをしみじみと感じ、時の流れを味わっているから。
- エ 一年・二年ともに雨だったという貴重な時間の流れを、味わい深く感じているから。

問九 次の会話は、この作品を読んだ生徒A・Bが「貴子・美和子」の人物像について発表したものです。本文の内容として適当でないものを次のア～エから一つ選んで、記号で答えなさい。

- ア 生徒A 貴子は友達思いの優しい人です。
- イ 生徒B 貴子は少し怖がりな所もあります。
- ウ 生徒A 美和子は怖がりの甘えん坊な感じの人だと思いますよ。
- エ 生徒B 美和子は素直なところもあってさばさばした人のようです。

受験番号

七		六		五			一		八		七		五		四		三		二		一		六		三		二		一				
落	最初	ら	い	お	A	C	A	も	自	エ	た	そ	ル	最初	I	誤	③	⑩	⑧	⑤	①	D	A										
ち	聞	彼	急	の	エ	普	言	な	分	六	は	の	ー	偶	イ	光	エ	シユツ	エ	経験	得意	ハクハク	はいゆう										
て	に	ら	か	れ	C	遍	語	い	の	イ	食	リ	ル	然	II		④		ニ											⑨			
い	グ	の	す	の	ア	的	B	と	発		ベ	ン	に	的	ア	正	イ	⑪	ウ	⑥	②	E	B										
く	ラ	驚	彼	身	ニ	な	無	い	言		な	ゴ	何	く	III		⑥		(1)											イ	四		
ハ	ニ	異	ら	体	ア	正	根	う	に		い	は	か	最後	ウ	行	ウ	ジャク(ニヤク)	イ	⑦	③	F	C										
ア	く	的	を	の	三	し	拠	こ	何		ほ	痛	根	の	も		ウ		イ												(2)	イ	五
九	よ	な	根	重	ウ	さ	ル	と	の		う	ん	拠	の			四	④	④	④	④	G											
ウ	う	体	め	さ	四	ル	ー	。	普		が	で	が			五	イ															⑦	ウ
	な	力	し	か	イ	の	ル		遍		よ	い	あ				五	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤	⑤									
	星	に	く	ら		の	ル		性		い	る	る			イ	⑤															⑤	⑤
	空	感	思	、		集	合		も		。	か	の																				
		動	い	つ					客			ら	か																				
		す	な	い					観			あ	な																				
		る	が	つ					性																								

漏れている、吸い込まれ、満天の星空

45

思い。

30

とくじや。

食(も)らい(

ました。

余計

いた(つた)

受験番号
